

網走港

網走市建設港湾部港湾課

〒093-8555 網走市南6条東4丁目

☎0152-44-6111

URL : <http://www.city.abashiri.hokkaido.jp/>



1. 概況

〈沿革〉

網走港は、北海道の北東海岸にある網走湾の西端にあって、網走川の河口部に位置する河口港から発展してきた。

この地への和人の既住は、貞享2年松前藩の宗谷場所が開設されてから始まったとされている。

その後、寛政2年斜里場所に属し、寛政10年、網走番屋の建設により沿岸開発の拠点として重要性を増していった。

明治21年、道庁の命を受けた英国人技師スコット・メークがオホーツク海沿岸の調査を実施し、網走港の計画を製作した。

その後、明治29年、道庁技師広井勇博士により調査検討が加えられ、明治31年、網走港修築の基本設計が提出された。

明治43年、北海道第1期拓殖計画により網走港修築事業が採択され、避難港として大正8年8月に着工し、11年の歳月を費やして昭和5年に外郭施設が竣工し、同時に町営による網走川筋物揚場も完成した。

この時期開始された北千島海田開発と近海漁業の急激な勃興に伴い、北洋漁業の根拠地として、また知床半島の開発、樺太開拓の進展により、港の拡張整備が切迫した問題となってきたが、その実現を待つこととなった。

戦後、網走港をめぐる社会情勢が大きく変貌し、木材、農産物の積出し、漁業基地、網走、北見地方開発の拠点として大型けい留施設、外郭施設の整備促進が望まれ、昭和28年地方港湾に指定された。

その後、-7.5m岸壁 1バース、-5.5m岸壁 3バースが昭和46年までに完成し、昭和50年までに-8.0mドルフィン、木材整理水面、物揚場等一連の木材処理施設が完成し、昭和53年重要港湾に指定され、網走港湾計画を策定した。

昭和61年新港地区の造成に着手し、昭和62年-5.5m岸壁2バースが供用開始し、昭和63年8月には-7.5m岸壁1バース、-10m岸壁1バース、平成5年には-12m岸壁1バースが、平成7年には-7.5m岸壁2バースがそれぞれ完成した。さらに、平成14年からは小型船だまりの造成に着手し、平成20年度に完成した。

この間、昭和45年出入国港、昭和55年開港、昭和57年検査港、平成11年植物防疫港の指定を受け名実ともに国際貿易港として確固たる位置を占めるに至った。

港湾取扱貨物量は平成30年39万5千トンで、主な取扱品目は石炭、コークス等の鉱物資源、麦、水産品、セメント等である。

今後、網走港は、北網圏の物流機能、市民・観光客が集い楽しむことができる観光拠点機能、防波堤の延伸等による安心・安全な港湾機能の充実を基本方針として、整備を進めていく。

〈地勢〉

網走港は北海道北東部、北緯44度01分、東経144度16分に位置する。

北に能取岬、北東に知床半島がオホーツク海に突出し、網走湾を形成する。

網走港はこの網走湾の西端に位置し、背後圏には北見山地、千島火山脈が控えている。

これらの北東に面する山麓傾斜地が北網圏域であり、圏域の大部分は丘陵性の平野で形成され、肥沃な農耕地と森林地帯を形成しながら多くの湖沼を抱き、オホーツク海に向かって展開している。

河川は、常呂川、網走川、藻琴川、止別川、斜里川があり、いずれも北東方面に雁行しながら支流を集めてオホーツク海に注ぐ。

海岸線は概して単調で屈曲がない。

能取岬、知床半島には丘陵が海岸に迫り断崖をなすが、半島に挟まれた中間部約40kmはなだらかな砂丘地帯となっている。

〈特徴〉

網走市は、めざすまちの姿の核として、自然・食・文化などの様々な網走の魅力を人々に誇れるよう、また、地域資源をもとに、幅広い分野で産業が活発に展開されるよう取り組みをすすめている。

当地方は、比較的温暖な海洋性気候で、全国でも最寡雨、最長日照地帯として知られ、農林業や、世界三大漁場の一つであるオホーツク海を背景とした漁業が発達している。

また、能取岬から知床半島に至る網走沿岸は多くの湖沼に恵まれ、これらの砂丘にはハマナス、クロユリなどの海浜植物の大群落が見られる。

冬季は、毎年1月から3月にかけての数十日間は流水と結氷により海や湖は氷原と化し、白一色の世界となる。近年、この流水を観光資源として「あばしりオホーツク流水まつり」などのイベントも開催されている。

平成21年1月には「道の駅」と「みなとオアシス」の機能を併せもつみなと観光交流センターがオープンした。これは、冬の流水砕氷船「おーらら」の乗降場であるとともに、地元特産品の紹介、販売場として多くの市民・観光客に利用されている。